

旧石器時代後半における石器群の諸問題

－新たな相模野編年の構築に向けて－

旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム

はじめに

1994年から1999年までの6回にわたってプロジェクトチームで継続的に検討してきた「神奈川県下における旧石器時代遺跡の各文化層から出土した石器群の特徴と問題点」については全時期一応区切りがついたもので昨年度で終了した。未解決の問題点を残しながらも、個人研究ではなし得なかった成果があったものと確信している。

本年度は鈴木次郎、矢島國雄両氏の相模野編年と諏訪間順氏の相模野12段階編年の分析を中心に検討する。周知のように、相模野編年を創設した鈴木・矢島編年は1960年代の後半に行われた大和市月見野遺跡群の発掘調査や分布調査を契機として1976年「相模野台地における先土器時代研究の現状」と題して神奈川考古1号に発表された（鈴木・矢島1974）。その成果は各段丘面におけるローム層中の複数の黒色帯や特徴的なスコリアの存在と共にその厚いローム層中から石器群が層位的に出土したことにより、具体的な石器群の編年が明示された。その上で新たに良好な層位的出土例をもつ遺跡をもとに、遺跡間の出土層位を微視的に比較検討し、最小の文化層を単位とした諏訪間順氏の「相模野台地における石器群の変遷－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」と題して神奈川考古24号に発表された（諏訪間1988）。両氏等の先験的で、緻密な時期区分論は大きな評価が与えられる。しかし時期区分は設定者の視点によって様々な意見があるのは当然のことであり、一つの視点のみが正しいということではない。時期区分は大別すれば細別が、細別すれば大別の論議がでるのは宿命のようなものである。したがって相模野編年を捉える場合には、単なる区分に迎合または批判するのではなく、両編年の時期区分の歴史的背景や時期設定者の視点が重要となる。

かくて鈴木・矢島両氏と諏訪間氏の相模野編年の分析をすることになった。そのうえで新たな相模野編年を創り上げることができるかどうか模索することにしたい。

（白石浩之）

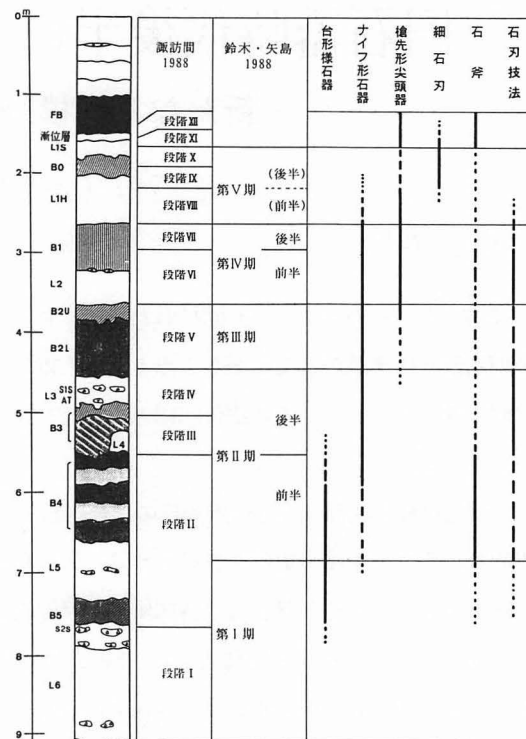
1999年 旧石器（先土器・岩宿時代）研究プロジェクトチーム活動報告（11月30日現在）

- 1月14日 今後の研究テーマの決定：『新たな相模野編年に向けて』
- 2月16日 大塚健一：「相模野編年とその問題点」
- 4月16日 畠中俊明・栗原伸好：「矢島・鈴木編年と諏訪間編年の比較・検討-その1-」
- 5月17日 畠中俊明・栗原伸好：「矢島・鈴木編年と諏訪間編年の比較・検討-その2-」
- 5月18日 御堂島 正：「石器の使用痕分析」
- 7月16日 井関文明：「相模野編年上における剥片剥離工程と調整加工の類型化」
- 8月5日 吉岡遺跡群B区（第2次調査）における出土遺物および基本土層の検討
鈴木次郎：「相模野の編年研究の歩み（～1988）」
- 8月16日 吉田政行：「編年区分におけるナイフ形石器の捉え方」
- 11月2日 砂田佳弘：「相模野旧石器時代の相対年代と絶対年代」
- 11月16日 『情報交換』

相模野編年の現状と課題

1. 相模野編年の成立と現状

相模野編年は、相模考古学会による遺跡分布調査や月見野遺跡群・上土棚遺跡・小園前畑遺跡・地藏坂遺跡等の発掘調査の成果をもとに1972年に大枠が示され(小野他1972)、1976・1978年に詳細な内容が提示された(矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978)。そこでは、古富士等の火山活動・相模川の地形形成・気候変動及び海面変化といった相模野周辺の自然環境の変動の中で、石器群の変遷・遺跡群の増減といった人類活動の歩みを捉えらえるという方向が示された。そして、石器群を捉えらえる視点としては、剥片剥離技術や細部加工技術で示される技術基盤と器種(形態)・型式が一体の相関関係を持つという「石器群の構造」を重視し、相模野第Ⅰ～Ⅴ期に時期区分を行った。その内容は、第Ⅰ期が石刃技法とナイフ形石器の出現以前、第Ⅱ～Ⅳ期がナイフ形石器の隆盛



第1図 相模野編年と主要器種の推移

(Ⅱ～Ⅳ期は器種組成やナイフ形石器の特徴と技術基盤の違いにより区分される)、第Ⅴ期がナイフ形石器に代る槍先形尖頭器や細石刃の隆盛により特徴付けられる。その後、1988年には、新たに蓄積された豊富な資料をもとに細部の見直しがなされ、5期区分を維持しつつ細分を行っている(鈴木・矢島1988)。また、諏訪問順は、各石器群を出土層位で整理し、各器種の消長と形態組成の変化及び技術基盤の変化等によって石器群変遷の画期を捉え、段階Ⅰ～段階Ⅻの区分を行っている(諏訪問1988)。諏訪問による12の段階区分は、縄文時代草創期前半の石器群まで対象としていることや、細石刃石器群を2段階に区分していることなど、鈴木・矢島の編年と細部では異なるものの両者の区分は概略対応している。

2. 相模野編年の課題

現在、相模野台地の石器群の変遷は、立川ローム下部を除きおおよそ明らかにされている。もちろん細部の推移や石器群変化の背景・評価については、今後解明すべき問題点も多く、槍先形尖頭器の出現とその経緯、第Ⅱ期後半(段階Ⅲ・Ⅳ)と第Ⅳ期前半(段階Ⅵ)の石器群の類似性と相模野第Ⅲ期(段階Ⅴ)の評価、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群の同時期併存の問題、細石刃石器群の終末と神子柴系石器群の関係など枚挙にいとまがない。こうした中で、相模野第Ⅰ・Ⅱ期(段階Ⅰ～Ⅲ)の石器群の内容は、この地域のロームの厚さが災いして立川ローム下部の調査資料が少ないため完全に明らかにされているとはいえない。近年は、綾瀬市吉岡遺跡群など調査事例の増加に伴って当該期の再検討も行われているが(白石1996・矢島他1998)、解決すべき問題点が多く残されている。

最古の石器群

武蔵野ロームより下層の石器群は、南関東では東京都の多摩ニュータウンNo.471B遺跡があるだけで、県域では知られておらず、今後、横浜・川崎市域の多摩丘陵、相模野の座間丘陵、県西部の大磯丘陵などの高位段丘の遺跡探索が課題とされる。

立川ロームの最下部では、石器の可能性のある資料は単発的には発見されているものの、まとまった発掘資料としては、吉岡遺跡群D区B5層が最古の石器群である。

石刃技法とナイフ形石器の出現

相模野第Ⅰ期は、武蔵野台地の西之台BX、中山谷X、武蔵台Xbといった、石刃技法とナイフ形石器の存在が明確ではなく、チャートを多用した揉錐器・削器・ナイフ状石器等の小形剥片石器と礫器・石斧から構成される石器群の存在を想定しており（鈴木・矢島1988）、諏訪間の段階Ⅰも同様と考えられる（諏訪間1988）。相模野では、今のところ、ナイフ状石器・台形様石器・削器・彫器等からなる吉岡遺跡群D区B5層の石器群がこの時期に該当する。

これに対して、相模野第Ⅱ期は石刃技法とナイフ形石器の出現をもって画し、その前半期は武蔵野台地のX層上部～IX層出土の石器群をもって位置付けた。その内容は、刃部磨製を含む石斧と台形様石器が発達し、ナイフ形石器は石刃素材の基部加工が安定してみられるものの、二側縁加工は非常に不安定である。相模野では、層位的にはL5上部～B4層出土の石器群が対比されるが、石刃は古山遺跡L5層上部等で出土しているものの、ナイフ形石器は今のところB4層上部にみられるだけで、B4層下部～中部の石器群は台形様石器や楔形石器により特徴付けられる。このことは、これらの石器群が器種組成の一部を構成するだけで、この時期の全体像がいまだ明らかにされていないのか、あるいは、こうした相模野の状況がこの時期本来のあり方を示すもので、武蔵野や下総台地などのナイフ形石器出土遺跡を再検討すべきなのかが問題となる。ちなみに当該期の資料が豊富な、下総台地では、楔形石器を特徴とする石器群はX層からIX層中・下部までみられる一方で、中山新田Ⅰ遺跡IX層下部では、台形様石器とともに石刃素材の基部加工や二側縁加工のナイフ形石器もみられる。

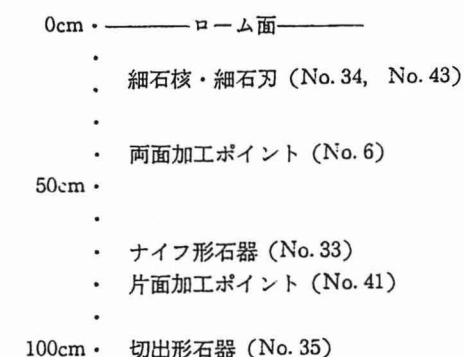
（鈴木次郎）

研究史

神奈川県内における旧石器時代遺跡の研究は、以前から活発に行われてきた。特にローム層の堆積状況が良好な相模野台地上の調査事例は、その好条件から編年研究に積極的に用いられ、その成果は各地の石器群の編年観にも大きな影響を及ぼしてきたといえよう（矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978、諏訪間1988など）。

1965年、岡本勇・松沢亜生は、相模野台地上における旧石器時代遺跡の分布調査の成果を報告し、当時の本台地上に44ヶ所もの当該期遺跡が存在していることを明らかにした（岡本・松沢1965）。各遺跡からは、細石核・ポイント・ナイフ形石器など各時期の石器が採集されており、各石器間の時間的位置関係はローム層の最上面から各遺物が包含されている部分までの深度で提示され、「無土器時代の石器編年を考えるひとつの資料となるであろう」とした（第2図）。これは、各遺跡間における土層の堆積状況の類似性を示すと共に、本台地における編年研究の優位性を示していると言えよう。

1960年代後半になると、上土棚・月見野遺跡群等の調査や相模考古学研究会による分布調査等が、また、武蔵野台地では野川遺跡の調査が実施され、石器群の時空間的なまとまり



第2図 各石器の出土位置(岡本・松沢前掲より)

第1表 相模野編年に関する主な発掘調査・文献・シンポジウムの実施時期一覧

主な遺跡の発掘（本格）調査実施時期			主な文献・シンポジウム等の開催時期	
1968.12・1969.02 1968.09～同 10	綾瀬市 大和市	上土棚遺跡（1次） 月見野遺跡群（1次） （第Ⅰ、Ⅱ、第ⅢA・B、第ⅣA～D遺跡） 月見野遺跡群（2次）（第ⅢC・D）	1965.1	岡本・松沢「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」 『物質文化』6
1970.02 1971.08 1972.03 1973.03 1973.12 1975.03	大和市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市 綾瀬市	相模野第149遺跡 小園前畑遺跡 地蔵坂遺跡（1次） 地蔵坂遺跡（2次） 地蔵坂遺跡（3次） 報恩寺遺跡	1971	相模考古学研究会『先土器時代遺跡分布調査報告書相模野篇』
1976.11～1977.01 1977.04～同 05 1977.06～1978.03 1977.07～同 12	相模原市 大和市 大和市 綾瀬市	下九沢山谷遺跡 上和田城山遺跡（1次） 上和田城山遺跡（2次） 寺尾遺跡	1976.05	矢島・鈴木「相模野台地における先土器時代研究の現状」 『神奈川考古』第1号
1978.12～1981.01	大和市	一般国道246号線関係 上草柳〔第1・2地点、 第3地点東・中央・西、 第4地点〕遺跡 下鶴間長堀遺跡	1978.11	鈴木・矢島「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ』（1）
1979.07～同 12	大和市	月見野遺跡群 上野遺跡第1地点（1次）	1979.12	シンポジウム『ナイフ形石器文化終末期の問題』（神奈川考古同人会）
1980.04～1981.02 1980.10～1981.05 1980.10～1982.04 1981.02～1983.03 1981.07～1982.05 1981.10～1982.10 1981.11～同 12 1982.06～1984.01	綾瀬市 大和市 大和市 座間市 相模原市 大和市 海老名市 大和市 藤沢市	早川天神森遺跡 月見野遺跡群上野遺跡第1地点（2次） 栗原中丸遺跡 橋本遺跡 月見野遺跡群上野遺跡第1地点（3次） 柏ヶ谷長ヲサ遺跡 深見諏訪山遺跡 代官山遺跡	1982.11	シンポジウム『南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題』 （神奈川考古同人会）
1983.04～1984.07 1984.06～1985.07 1985.07～1995.03	大和市 相模原市 清川村	長堀南遺跡 中村遺跡 宮ヶ瀬遺跡群 〔サザランケ、ナラサス、上原、中原、 北原、南、馬場、大野原遺跡〕	1988.03	鈴木・矢島「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ』（1）〈新版〉
1987.08～同 12 1987.02～同 06	大和市 綾瀬市	長堀北遺跡 上土棚遺跡（2次）	1988.04	諏訪間「相模野台地における石器群の変遷について 一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握一」 『神奈川考古』第24号
1988.05～1990.06	藤沢市	慶応SFC	1988.08	第1回研究討論会『AT降灰以前の石器文化』（石器文化研究会）
1989.07～同 09	綾瀬市	地蔵坂遺跡	1989.03	鈴木「第一章 先土器時代一赤土の中に残された人類の文化」 『大和市史1 通史編 原始・古代・中世』
1990.04～同 12 1990.10～1994.09 1991.04～1992.03 1992.04～1994.09 1992.06～1995.10	綾瀬市 綾瀬市 大和市 平塚市 伊勢原市	上土棚遺跡（3次） 吉岡遺跡群（1次） 県営高座渡谷団地内遺跡 原口遺跡 三ノ宮・下谷戸遺跡	1989.09	第2回研究討論会『AT降灰以前の石器文化』（石器文化研究会）
1994.04～1998.12	藤沢市	用田バイパス関連遺跡群（1次）	1991.04	シンポジウム『AT降灰以前の石器文化 ～関東地方における変遷と列島内対比～』 （石器文化研究会）
1994.11～1995.01	綾瀬市	地蔵坂遺跡	1994.03	第1回 石器文化研究交流会（石器文化研究会）
1996.10～1997.07 1997.05～1998.09 1998.04～2000.03	相模原市 大和市 綾瀬市	田名向原No.4遺跡 （仮）大和配水池内遺跡 吉岡遺跡群（2次）	1994.1	第2回 岩宿フォーラム／シンポジウム 鈴木「南関東地方の様相」 『群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集』
			1995.02	静岡県考古学会シンポジウムIX 諏訪間「南関東地方AT上位石器群の変遷」『愛鷹・箱根山麓の 旧石器時代編年』
			1996.07	シンポジウム『AT降灰のナイフ形石器文化～関東地方における V～IV下層段階石器群の検討～』（石器文化研究会）

が明らかになってきた。1970代に入り小野正敏・鈴木次郎等は小園前畑遺跡の発掘調査報告書の中で最初の相模野V期編年を提示した（小野・鈴木ほか1972）。これは単に石器組成・石器製作技術等の考古学的視点からのみの分析ではなく、絶対年代・地形・地質・気候変動・火山活動等の視点も踏まえた編年案であった。しかし、この時点ではまだ鈴木等が編年を考える上で最も重視している「石器群の構造」的視点は提示されていない。その後、矢島國雄・鈴木は小園前畑遺跡同様幅広い分析視点から「第四紀総合編年」をめざし、新たな相模野V期編年を提示した（矢島・鈴木1976）。ここでは、「各期の石器群について、石器製作技術（特に剥片剥離技術）と石器組成（特に特定器種・形態の消長）」を主体とし編年を行っているが、その背景にはこの両者に強固な結びつきが存在していることを主張している。それは、①各期の石器群には剥片剥離技術と特定器種・形態に強い関連があること、②量的に少ない直接生産用具および間接生産用具は、独自の

剥片剥離技術を持たず、その時期の特徴的な剥片剥離技術によって獲得された目的剥片や任意の剥片を素材とすること、③調整剥離技術においても直接生産用具に多用されるものが間接生産用具にも用いられる例が多いという3点についてであり、両者のこのような関連性を「石器群の構造」とした。以後資料の増加等に伴いいくつかの補足修正案も提示されてはいるが（鈴木・矢島1978、1988、鈴木1989、1994など）、「石器群の構造」という捉え方は、相模野V期編年の基本的な考え方となっている。

これに対し諏訪間順は、その後の資料の増加により基本的枠組みは変わらないものの、いくつかの相模野V期編年の細分案が提示される中で、「各期の細分された各々の石器群の内容は、相模野台地の移りゆく石器文化の一つの過程（段階）をそれぞれ表すものとして、積極的に評価する必要があるのではないだろうか」という見解から、「重複関係を持つ石器群を一文化層ごとに層位的に並べて整理し、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃、石斧等の出現・発展・終焉と、各器種の形態組成の変化、さらに剥片剥離技術と調整加工技術を中心にした技術基盤の変化等によって画期を見だし、この画期から次の画期までの共通した特徴を持つ石器群を抽出し段階として設定」している（諏訪間1988）。この結果、諏訪間は鈴木等の相模野第Ⅰ～Ⅴ期までを10段階に、縄文草創期を2段階の合計12の段階に区分した。本編年においても、鈴木等と同様各段階の石器群について「新器種の出現、石器組成、技術基盤は全て構造的な強い結び付き」を持っている点を重視しているが、同時に「ある段階では石材までもその構造下に組込んでいる」とし、「石器群の構造」上における石材という視点の重要性についても新たに言及している。

現在、上記のような編年案が広く用いられているが、近年これまでは様相を異にする石器群も数多く発見されている。相模野V期編年から二十余年・12段階編年から十余年、今一度相模野編年を再考する時期にあるのではないだろうか。岩宿の発掘から半世紀経った今だからこそ、0の視点から・・・（栗原伸好）

器種組成と編年

前回までの本プロジェクトにおいては、相模野基本層序（L1S～L6層）毎に県内の遺跡を集成してきた。その際、膨大な数の石器を、石材をも含めて網羅的に洗い出すといった作業を行ってきた。今回は、これまでの集成結果を視覚的に把握できるよう、主な器種についてその出土層位を縦軸として器種組成を模式図化して示した。模式図は、およそ70遺跡230文化層余りのデータから作製した。

さて、この模式図を横方向にみていくと、それぞれの層位における大雑把な器種組成を追うことができる。そこで層位毎にみると、器種のバリエーションが豊富な時期、ある器種が卓越し、偏った組成をみせる時期等の存在が浮かび上がってくる。

ここで最も明確なのは、L3層の様相であろう。主な器種では、ナイフ形石器がわずかにみられるのみで、その他の器種は県内では今のところ皆無である。遺跡数もこの時期に一端激減しており、その後B2層にて「爆発的に増える」という表現がまさに当てはまる状況である。

B2層では、角錐状石器や円形搔器といった、非常に特徴的な器種が現れると共に、器種組成もバリエーションに富む。その他、しばしば集石状に出土する磨り石の存在も看過できない。

L3層同様L2層下部でも、遺跡数の減少、器種組成の単純化がみられ、それに続くB1層では、遺跡数が急増し、縦長剥片素材のナイフ形石器を中心に、器種の多様化が認められる。しかしながら、L3層の場

層 序	ナイフ 形石器	台形様 石 器	尖頭器	角錐状 石 器	細石器	石 斧	局 磨 石	部 製 斧 石	楔 形 器	搔 器	削 器	彫 器	錐	礫 器	磨り石	敲き石	台 石
L 1 S 層																	
B O 層																	
L 1 H 層																	
B 1 層																	
L 2 層																	
B 2 U 層																	
B 2 L 層																	
L 3 層																	
B 3 層																	
L 4 層																	
B 4 層																	
L 5 層																	
B 5 層																	
L 6 層																	

第 3 図 県内の旧石器時代器種組成模式図

合と異なるのは、少ないながらも尖頭器といった新しい器種の萌芽が L 2 層以前から認められ、そして近年の発掘調査から、L 2 層中にその製作工程を看取できるという点である（小池1999）。こうした事例から、「（相模野Ⅲ期とⅣ期）両石器群を切り放して検討するのではなく、この両者の連続性を視野に入れた分析が必要であろう。」といった見解も示されている（栗原1999）。

これらの新たな発見や成果は、尖頭器の出現に関する議論や編年的な解釈に一石を投じるものとする。尖頭器に限らずその他の器種でも、資料の増加に伴い、それまで存在していなかった時期、その出現時期が大幅に修正されることもあり得るだろう。ただ、器種の有無からだけでは、編年を構築することはできない。また、発掘担当者の視点によって、器種の捉え方も様々であり、一概に有る無しといった判断を下すことは危険である。個々の器種について、石器群の中での位置づけを明確にした上で、その時間的・空間的な広がりをつまえていくことが必要であろう。

今回は報告書の記述に従って集成された、主な器種の組成データのみを、模式的に掲載するにとどまった。

編年学的な研究における特徴的な器種については、多くの研究者によって多角的に分析され、数多くの論文が発表されている。今後はそうした先人の研究成果を参考に、各器種への理解をより深め、地域編年の構築に、器種組成の観点からアプローチしていくことも有効な手段と考える。(畠中俊明)

石材組成と編年

神奈川県はいわゆる在地系石材と呼ばれている凝灰岩系石材や安山岩系石材など豊富な石材の入手が比較的容易に行える環境にある。例えば相模川や酒匂川など、もしくはその河川から派生する中小河川では、現在もなお良質な凝灰岩や、その他砂岩・安山岩などの石材が散在している。また、特に県西部においては黒曜石や黒色ガラス質安山岩などの原産地、箱根を越えた伊豆でも数カ所の黒曜石原産地が存在する。

そして近年出土資料に対する自然科学分析等が盛んに行われ、石材の付加情報として単に種別のみではなく、原産地など、より細かい付加情報を得ることが可能となった。このことにより、特に黒曜石は遺跡内における分布単位であるブロック等の更なる細分を可能にした(望月 1996ほか)。

また石材を意識的に選択していたであろうという指摘は数多くなされており、本研究プロジェクトチーム内でも器種、石器製作技術、遺跡型などにより、石材の選択が行われていたであろうことの予想はなされている。(旧石器・先土器・岩宿時代研究プロジェクトチーム 1994～1999)。今回はこうした石材研究の現状はあるものの、あくまでもこれまで旧石器・先土器・岩宿時代研究プロジェクトチームにより層位ごとに集成されてきた石器群のデータ(前出文献)とこれに伴いそのなかで指摘されてきた石材に関する記述等をもとに、石材利用の変遷を追うことで、石材からみた編年構築のための1要素の抽出を試みることにする。

まず、前出のプロジェクトチームによって指摘された石材に関する記述を、以下にまとめてみたい。

- ① 漸移層から上層(縄文時代草創期)では黒曜石は激減する。
- ② 細石刃石器群はその型式により、用いられる黒曜石が異なる(原産地)。
- ③ L1H層中位では黒曜石中心、在地系石材中心、その折衷型など石材組成に多様性をもち、特にこの時期の代表器種である槍先形尖頭器は安山岩製が中心となる。
- ④ L1H層下部では黒曜石が石材組成の大半を占める。
- ⑤ B1層からL1H層にかけて徐々に黒曜石の量が増えてくる。
- ⑥ L2層からB1層にかけてはチャートと凝灰岩が中心の石材組成がみられる。
- ⑦ B2層では凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・ホルンフェルス・黒曜石が主な石材組成であり、特に黒曜石は伊豆・箱根系のものが大半を占める。
- ⑧ B3層上部からL3層にかけては黒曜石は信州産が主体であり、B3層中-上部あたりから、黒曜石の量が爆発的に増大する。
- ⑨ B3下部からL4層位から黒曜石の量が増え始める。
- ⑩・ B5層チャート主体で、霧ヶ峰産黒曜石わずかに見られる。これ以降黒曜石は徐々に増え始める。
- ⑪ L6層では在地系石材のみで、黒曜石は見られない。

以上①から⑪まで大きく11の記述点を取り上げてみたが、細かくみるとさらに多くの点が指摘されている。これらを元に層位を時間軸として石材利用の流れを考えてみると、まず現在判明している県内の旧石器時

代最古の石器群はL6層から出土しているが、この時期には黒曜石は用いられず、在地系の凝灰岩系の石材やチャートなどを主に用いていた。B5層から黒曜石が僅かに見られるようになり、B4層下部では水晶製石器が発見されており、遠隔地石材を用いるようになる。B3層下部位から黒曜石、特に信州産黒曜石の利用が爆発的に増大する。そしてL3層からB2層にかけ黒曜石は信州産から伊豆・箱根系の黒曜石に変わり、石材構成比では黒曜石が石刃技法、二側縁加工のナイフ形石器量産という背景を受けて高い水準を保つ。黒曜石の他に凝灰岩やガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスなど石材種は多様になり、その後、L2層からB1層下部までは黒曜石も少々減少し、凝灰岩やチャート中心の石材組成を示す。B1層からは黒曜石が次第に増加し、B1層中位では前に続き黒曜石中心の石材組成を示す石器群と、黒曜石以外の石材が中心となる石器群、これらの中間型の石器群と石材組成に多様性がみられるようになり、L1H層下部では石材組成の8～9割を黒曜石が占めるようになる。L1H層上部から器種の中心となる細石器石器群では、より古いとされる代官山型が伊豆・箱根系黒曜石、次に出現する野岳・休場型は神津島産の黒曜石が用いられ、なかでもより上層から出土する野岳・休場型は在地系の石材が多く用いられている。さらに後出の船野型では黒曜石はほとんど用いられず、在地系の石材が主に用いられる。この後、縄文時代草創期に入ると、黒曜石は激減する。

以上のように、相違点や特徴などが窺え、大まかに流れを掴むことが出来た。層位を時間軸にすることによって多少問題は残るが、この相違点や特徴などを画期と捉えるならば、従来の県内、とりわけ相模野台地の編年とは大幅な変動はないと思え、やはりある特定器種の移り変わり、石器製作技術の変化等に伴い、その器種、技術に合った石材の意識的な選択があったと推定できる。このように、こうした石材の移り変わりも、編年を構築していくうえでは、一つの裏付けを行える要素になりうると考えられる。(大塚健一)

遺跡の移動過程から見た相模野編年について

旧石器時代は移動をしながら狩猟・採集を基本として生活を行っていたことは事実であろう。しかし移動する過程は様々であったものと思われる。例えば①既存の居住地を遺棄して別の新しい居住地へ移動した場合、②道具としての石器石材の入手経路、例えば遠隔地の石材を入手するような場合、③中・長期的な狩猟活動の場合など、実にさまざまなケースによって移動が行われたことが推定される。

旧石器時代の人々は中小河川域の見晴らしのきく台地の縁辺部によく占地する。そして通常川筋で拠点的な集落をベースとして離合集散が行われたものと考えられる。しかし川筋に分布する遺跡間での接合や個別資料の比較検討がほとんど行われていないので、本当に川筋で展開したのかどうかは今のところ真実は明らかではない。河川と河川の間にはさまれた区域の移動も可能性の視野に入れて考えられ、テリトリー内では柔軟な行動をとったのではないかと推察するのである。

1. 石器石材・素材の搬入と搬出による動き

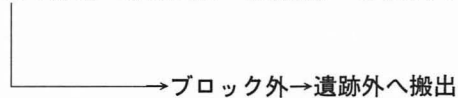
旧石器時代の集落は主にAT降灰以前の環状集落とAT以後の弧状ないし「い」の字状集落を形成している。これらの集落は集落形成の途上というよりは集落形成後の最終的な形態を示している。それでは環状集落が当初から作り出したものだろうか、この点は一概に規定できない。縄文中期の環状集落をみても、勝坂式と加曽利E式では前者が外環状、後者が内環状といったように、時期により環状の位置が異なっている。それでいて環状という円構成を崩していない。このことから環状集落の場合にも円構成を基本としたブロッ

ク配置は当初から彼らの頭の設計図の中に描かれていたのであろう（白石1992）。それでは全く当初から全てのブロックが構築されていたのかということになると、そうではない。石器石材・素材、つまり石器石材・石器素材・石製品の搬入・搬出また礫の搬入等によって、円構成を保ちながらもブロックがそのたびに変容していくのであろう。このようなあり方は大小の移動過程に伴う結果であろう。AT降灰後の弧状集落ないし「い」の字状集落の形成も同様であったものと思われる。

(1) 石器製材の搬入と搬出

石材は遠隔地と在地のものがある。遠隔地の石材は直接採取と交換による方法がある。在地の石材は一カ所の量的な問題があるが、点在しているので、常に一定量の石器石材が保証される。至近な例として吉岡遺跡群B4層中部のガラス質流紋岩は相模野台地では認められないので搬入品であろう。この場合石核自体が小さいので、原石ないし粗割石核を分割して利用したのであろう。

①遠隔地石材の搬入→遺跡内で分割→素材生産→石器製作→遺跡内での使用・遺跡外に搬出



また在地から採取された吉岡遺跡群B5層では全体の石材の90パーセントをチャートが占める。これらの石材は②在地石材の搬入→遺跡で分割→素材生産→石器製作→遺跡内での使用→廃棄といった一般的な図式を辿る。

(2) 石器の素材の搬入・搬出

始良Tn火山灰降灰後の石槍とりわけ槌状剥離尖頭器は例えば槌状剥離尖頭器の原形→槌状剥離尖頭器の製作→槌状剥離尖頭器の搬出といったように、場を変えながら移動している（白石1997）。このように製作址から直接消費地に持ち込むのではなく、中継地を経て消費地に搬出している。このようなモノの動きは同一集団が回帰的に行っているのか、別集団が分与したものかさらなる検討が必要とされる。

(3) 礫群の持ち込み

礫群は在地の河原から採集したものが目立つ。吉岡遺跡群C区B2層の礫の場合は24,379.3gで、凝灰岩が最も多く、中粒凝灰岩、砂岩、斑礫岩などよりなる。総体的に近場の水系の河床礫を利用したのであろう。一方頁岩など遠隔地の石材搬入は量的に少ない。礫群の運搬は極めて労働量は大きく、集落の形成にも礫採取できるような近場に形成した可能性もあろう。

2. 遺跡の移動過程からみた相模野編年

上述の点を踏まえて①石器石材、②素材、③石製品、④礫をみると第4図のようになる。

	① 石器石材	② 素材	③ 石製品	④ 礫	集落形態	鈴木・矢島編年	諏訪間編年	移動過程
相模野B5	□	×	×	×	環状?	相模野Ⅰ期	段階Ⅱ	1
相模野B4	□	×	▽	×	環状	相模野Ⅱ期	段階Ⅱ・Ⅲ	1
相模野B3	□	△	○	▽	?	相模野Ⅱ期	段階Ⅲ・Ⅳ	2
相模野B2	◇	▽	▽	◎	弧状	相模野Ⅲ期	段階Ⅴ	3
相模野B1	□	○	○	○	弧状	相模野Ⅳ期	段階Ⅵ・Ⅶ	4
相模野L1H	◇	○	▽	△	弧状	相模野Ⅴ期	段階Ⅶ・Ⅸ	5
相模野B0	□	○	○	?	弧状	相模野Ⅴ期	段階Ⅹ	5
相模野L1S	◇	◎	◎	▽	?	相模野Ⅴ期	段階ⅩⅠ	6

① ◇多様 □主たる石材と少数の石材
②～④ ◆多様 ◎多い ○やや多い ○やや多い △やや少ない ▽少ない ×認められない ?不明

第4図 相模野層位と石器石材等からみた移動過程の状況

◇や◎、○印は移動が多いものと仮定。移動過程から見て (1) B5層～B4層、(2) B3層、(3) B2層、(4) B1層、(5) L1H～B0層、(6) L1S層に暫定的に区分する。

※安蒜政雄、野口淳により 原料の搬入 → 作業工程 → 遺跡の石器群 の中で移動論を捉えている（安蒜1992、野口1995）が、別の視点から概観した。（白石浩之）

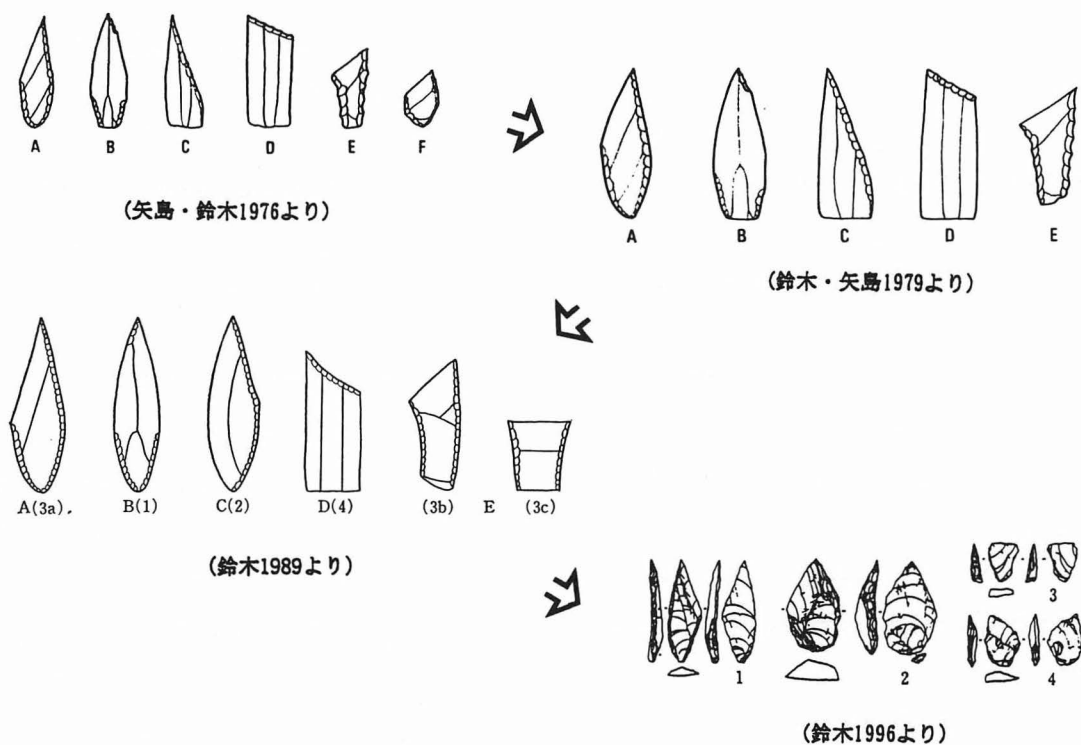
編年区分におけるナイフ形石器のとらえ方

列島における旧石器時代についての学史上、編年を組み立てる際に「ナイフ形石器」はある程度、大きな位置を占めている。また、列島の上部旧石器時代では主たる道具であったと考えられることから、その形態分析等も精緻に進められてきている。さて、編年研究については、鈴木次郎も述べるように「地理的なまとまりをもつ一地域内を対象とした地域編年の構築こそが基本」（鈴木1999）と考えられる。そこで本稿では、相模野台地を例に取った編年構築の際、「ナイフ形石器」がどのように扱われてきたかを確認したい。

相模野台地を例に取った旧石器時代編年については、鈴木次郎・矢島國雄による時期区分（矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978・1988など）や、諏訪間順による段階区分（諏訪間1988）などがある。鈴木・矢島らは「石器群の構造」をキーワードに、石器群全体を対象としてとらえ、個別石器と石器相互の關係に着目することで、その構造体の変化・推移から上部旧石器時代を5期に区分している。そのなかでナイフ形石器については、その形態組成も編年区分の要素としてあげられている。また、諏訪間は各器種の出現・発展・終焉、各器種の形態組成の変化、技術基盤の変化などを基準に画期をとらえ、相模野の層位に照らし合わせて上部旧石器時代を12段階に区分している。このように鈴木・矢島、諏訪間ともに、ナイフ形石器に関しては、形態分類から形態組成をおこない、編年区分の道具の一つとして用いている。

では実際にナイフ形石器がどのように扱われてきたかを、形態分類に関して、鈴木次郎の分類を例にみていく（第5図）。筆者は以前、鈴木の研究についてふれたことがあるが（吉田1998）、まず（鈴木1974）では相模野台地の石器群ではないが、砂川遺跡F地点のナイフ形石器を形態A～Dの4種にわけている¹⁾。次に、（矢島・鈴木1976）では形態A～Fの6種となった。しかし、続く（鈴木・矢島1978）では形態Fを削除し、A～Eの5種となる。その後、（鈴木1989）において形態Eの規定に修正が施され、さらに、（鈴木1996）では二側縁加工・基部加工・一側縁加工・部分加工の4種となり、その中の二側縁加工のものを「砂川型」「下九沢山谷型」「切出形」「小形幾何形」の四つに細分している。このように、分析手段であるナイフ形石器の形態分類については、時期区分に関する見解の変化もあって、若干の変遷をたどりつつも、加工の位置（部位）が主軸となり、さらに細かな形態で細分する方法が採用されたといえる。

形態の差が、ある程度時期差を反映したものと仮定し、類型化から組成へと展開する手法は妥当なものと考えられる。従って、類型化の内容が問われることとなるが、確かに、上記の分類群については、多くの研究者もイメージとして共有できるものであろう²⁾。しかし、その認定やさらなる細分については、より客観的な手続きが必要と考えている³⁾。たとえば竹岡俊樹が実践する形態測定・属性記述法（竹岡1989、1997など）がその例となるが、すでに筆者もその一部を援用してナイフ形石器の分類をおこなったことがあり（吉田1998）、数値化および量的属性による区分は有効な手法であろう。（吉田政行）



第5図 形態分類の例 (吉田1998を改編)

- (1) 実際にはA～Eの五つにわけているが、E類についてはナイフ形石器としてやや問題があるとされるため、ここでは除外して扱った。
- (2) ただし、加工の位置についても、石器の「握え方」の共通理解が前提となる。
- (3) 曖昧な加工・形態をもつナイフ形石器が出土し、どの分類群とするかで苦慮する機会はおそらくどなたもが経験されていることであろう。さらに遡れば、器種分類の時点で抽出した「ナイフ形石器」が果たして問題なくナイフ形石器として認められるものであるのか、特に、B 4層以下出土の資料については、ナイフ形石器・ナイフ状石器・台形様石器などはなほ疑問であるといわざるを得ない。

石器製作工程

ここでは、これまでの相模野石器群変遷の表現区分 (矢島・鈴木 1976, 諏訪間 1988等) を石器製作を中心とした内容で捉え直す。その際剥片剥離はⅠ類 (単設)、Ⅱ類 (両設)、Ⅲ類 (90度打面転位)、Ⅳ類 (求心状)、Ⅴ類 (盤状剥片素材) 等 (砂田 1989・1996, 井関 1997-1999) を、調整加工は両面 (石斧、尖頭器等)、片面 (角錐状石器等)、周縁 (搔器等)、二側縁 (削器・ナイフ形石器等)、一側縁 (彫器等)、部分 (台形様石器・楔形石器・錐形石器等) 等で構成される。

Ⅰ期＝段階Ⅰ 剥片剥離－調整加工は、両極剥離によって工程過程内 (Ⅰ－Ⅳ類) で連係する。剥片剥離は、自然礫面を除去する石核整形過程とは区別されるが、目的的な剥片剥離は特定化される類型過程の所産として把握されない。調整加工は部分加工が主体的と言える。吉岡D区-B5 (103) に代表される。

Ⅱ期前半＝段階Ⅱ 剥片剥離－調整加工は、両極剥離によって工程過程と決定過程 (例えば残核転用の楔形石器) に連係されるが、それとは別に両極剥離を媒介させない工程変換過程 (Ⅴ類) が識別される。

剥片剥離は礫面除去とは区別され、その中で打縁調整がある程度識別され、特定化される調整加工に連係する傾向（例えばⅢ類－ナイフ状石器・Ⅳ類－台形様石器）が指摘される。調整加工は、両面加工（石斧）が見受けられるものの前期＝前段階同様、部分加工が主体的であると言える。

例として吉岡C区－B4L・B4M（102）等が該当する。

Ⅱ期後半＝段階Ⅲ 剥片剥離～調整加工は、両極剥離を媒介させず、折断による工程過程と工程変換過程～決定過程の連係が主体的である。また剥片剥離と調整加工は共に多様であり、剥片剥離の多様性は特定化されない過程の所産として、調整加工の多様性は、一側縁、二側縁加工等の加工量の増大を示す変異として抽出される。

例として吉岡A区－B4U（100）・上和田城山第4次－Ⅲ（90）・吉岡C区－B3LU等が確認されている。

Ⅱ期後半＝段階Ⅳ 剥片剥離～調整加工は、折断を媒介させない工程過程～決定過程の連係として主体的であり、剥片剥離は礫面除去とは顕著に区別される。工程過程内での偏差は、特定化される類型（Ⅰ類）過程の結果を反映する傾向が看取される。調整加工は二側縁加工が主体的で、決定過程内での偏差は、加工量が著しい過程（ナイフ形石器）の量的多寡に左右される傾向が識別される。ここでは、剥片剥離と調整加工がともに独自の工程として組織され、剥片剥離は打縁調整等の剥片剥離内の調整過程をその副産として内在化させ、調製加工は対向調整加工等の異方向からではなく、連続した同方向からの剥離によって可能であり、つまり、折断を必要とすることなく工程過程～決定過程の連係が強化されていると考えられる。寺尾－Ⅵ（96）に代表される。

Ⅲ期＝段階Ⅴ 剥片剥離～調整加工は、複合的な工程過程と工程変換過程～決定過程とその決定過程の中断において恐らく再加工による転用、言い換えると、器種再生された可能性が指摘される変換過程、すなわち決定変換過程の連係として主体的である。この決定変換過程は、多様な調整加工痕の重複からの類推である。本段階の剥片剥離は、礫皮除去とは区別されず、段階的・並列的な工程変換過程等が確認され、かつ多様である。

調整加工も半両面（尖頭器）、片面（角錐状石器）、周縁（角錐状石器・円形搔器）、半片面（ナイフ形石器・切出形石器）、一側縁（国府型ナイフ形石器等）、二側縁（切出形石器等）、部分（基部加工ナイフ形石器・円形搔器）等同様に多様だが、中でも周縁加工や片面加工等は単一方向からの工程的な連係を重層化させることで成立していると判断される。

柏ヶ谷長オサ－Ⅵ－Ⅸ（74）・慶応SFC－Ⅳ（118）・上草柳2－Ⅱ（92）・代官山－Ⅵ・Ⅶ（109）・高座渋谷団地－Ⅴ（298）・下九沢山谷－Ⅳ（57）等の遺跡から抽出。

Ⅳ期前半＝段階Ⅵ 剥片剥離～調整加工は、組織的な工程過程と工程変換過程～決定過程と決定変換過程の連係が主体的である。剥片剥離は、打縁調整と打面調整を相互補完的に範囲限定させることで特徴的な類型（Ⅱ類）の過程に連係される傾向が指摘される一方、礫面除去、作業面・打面の形成及び再生、稜状調整過程等の石核整形は、独自に組織され決定過程に連係されない傾向が看取される。

調整加工は多様で両面調整（尖頭器）が識別される。また調整加工の中には、槌状剥離（有槌尖頭器）や彫刀面の作出、基部裏面平坦剥離（ナイフ形石器）等、異方向的な嵌入として部分的に交差する特徴も抽出され、剥片剥離におけるⅢ類と相同する過程が局所的ではあるが、単一方向からの連係の重複性を基に成立している。言い換えると工程過程あるいは工程変換過程と決定過程あるいは決定変換過程双方で重層的・自己完結的に組織される作業過程には構造的な互換性の役割が予測される。

石器群は下九沢山谷－Ⅲ・長堀南－Ⅳ(87)・深見諏訪山－Ⅳ(88)・橋本－Ⅲ(55)・栗原中丸－Ⅴ(70)・上原－Ⅴ(127)・中原－Ⅴ(126)・サザランケーⅤ(128)・福田丙二ノ区－Ⅱ等の石器群が確認されている。

Ⅳ期後半＝段階Ⅶ 剥片剥離～調整加工は多様化された工程過程と工程変換過程～決定過程と決定変換過程の折断による連係が主体的である。剥片剥離は、打面調整と打縁調整の関係と打面作出と作業面作出の関係を、相互補完的に置換し、礫面除去等の石核整形を最小限にすることで、決定過程に連係させる傾向が看取される。調整加工は、両面加工～部分加工までが看取されるが、本段階でも異方向的、嵌入的に交差する特徴が基部裏面平坦剥離、槌状剥離や彫刀面作出等として抽出されるが、本段階での調整加工の交差性は、剥片剥離の工程過程及び工程変換過程に小石刃剥離として転化されていると考えられる。

深見諏訪山－Ⅲ、代官山－Ⅳ－Ⅴ・下鶴間長堀－Ⅱ(86)・中村－Ⅳ(68)・本入こざっ原－Ⅲ(243)等から識別される。

Ⅴ期前半＝段階Ⅷ 剥片剥離－調整加工は、可逆性的方向性を持つ工程過程と工程変換過程－特定化される決定過程と決定変換過程（両面～周縁加工）が相互に連係し合う特徴が抽出される。この相互連係性は、言い換えれば、工程過程と工程変換過程－決定過程と決定変換過程の関係を並列化させるということであり、礫面除去から調整加工のみで目的的な決定過程に移行し、その副産として生じる決定過程からも工程過程及び工程・決定変換過程に連係される傾向が看取される。

上野1－Ⅳ(81)・寺尾－Ⅱ・月見野Ⅳ－A(77)・中村－Ⅲ・サザランケーⅢ・南原－L1H(242)等の石器群から上記の内容が抽出される。

Ⅴ期後半＝段階Ⅸ 剥片剥離～調整加工は並列的もしくは段階的に並列化される工程過程と工程変換過程～決定過程の連係が主体的で、その作業内容は、剥片剥離を重層化させる前提となる打面－作業面の相互依存性において設定打面を必要とせず、連係作業に必要な設定作業面の確保を中心とするという意味の作業面転位を基本とした細石刃剥離に特徴付けられる。この作業面転位による連係作業は、逆に言えば打面設定の解放を背景としており、調整加工の交差性をより促進させる契機になっていると考えられる。

代官山－Ⅲ・柏ヶ谷長ヲサーⅣ・中村－Ⅲ・上和田城山－Ⅱ(90)・吉岡B区－L1HU(101)等から。

Ⅴ期後半＝段階Ⅹ 剥片剥離～調整加工は前段階と同様だが、折断・両極剥離による連係が強化されることと細石刃剥離作業それ自体が剥片剥離作業と相同し、自己完結的に組織される傾向が指摘される。

上草柳1－Ⅰ・報恩寺(97)・栗原中丸－Ⅱ・上和田城山－Ⅰ・下鶴間長堀－Ⅰ(86)等の当該期石器群から内容の抽出が可能である。

草創期初頭＝段階Ⅺ 剥片剥離－調整加工は並列的に段階化される工程過程と段階的に並列化される工程変換過程－決定過程及び決定変換過程の連係が、主体的である。調整加工は決定過程に移行する相互連係性を段階的に構造化させることで、決定変換過程（尖頭器・石斧等）を柔軟にする傾向が把握される。

例として月見野上野1－Ⅱ(81)・寺尾－Ⅰ・長堀北－Ⅱ(85)・相模野No.149－L1SU(78)・勝坂－漸～L1S(67)。

草創期初頭＝段階Ⅻ 剥片剥離－調整加工は前段階と同様だが、調整加工相互の連係間で、漸移的な補正剥離として、すなわち間調整加工が構造化される（有舌尖頭器・石鏃等）。

月見野上野1－Ⅰ・月見野上野2(80)・花見山－FBL(31)・三ノ宮下谷戸(166)・吉岡B区－漸・青根馬渡No.4－漸科～L1S等。

(井関文明)

相模野台地・武蔵野台地・多摩丘陵の編年区分

ここでは相模野編年（相模考古学研究会編 1972、矢島・鈴木1978、1988、鈴木1989）、諏訪編年（1988）、と武蔵野編年（小田・キーリーC.T. 1973、1975、小田他1977）、そして多摩丘陵で構築した館野編年（1988）について概略をまとめる。

1. 相模野台地の編年

矢島・鈴木（1976、1988）、鈴木（1989）編年 鈴木次郎氏（1989）の編年では、生活面（検出層位）、発見した石器群の資料例、石器組成、石材組成、石器形態、剥片剥離技術などの多様な視点から分析を行っている。編年の特徴は相模野台地の層位のL 5層上部以下をナイフ形石器、石刃技法が見られず、台形様石器の未発達な時期として相模野第Ⅰ期、BB 2 L層下部からL 5層上部にかけてをナイフ形石器、石刃技法が出現、発達する相模野第Ⅱ期、BB 2 L層下部を除くBB 2層全層を他地域の石器群の流入・影響により、石刃技法、茂呂系ナイフ形石器が一時衰退、槍先形尖頭器が出現する時期として相模野第Ⅲ期、BB 1層からL 2層を石刃技法、茂呂系ナイフ形石器の発達と終焉、槍先形尖頭器が発達する時期として相模野第Ⅳ期、L I SからL 1 H層をナイフ形石器の消滅と槍先形尖頭器・細石刃の発達する時期として相模野第Ⅴ期と区分した。

さらに相模野第Ⅱ期と第Ⅳ期を組成や剥片剥離技術などからそれぞれ前半と後半に細分して整理している。

諏訪編年（1988）編年 諏訪順氏は、矢島・鈴木編年を軸としながらも、『移りゆく石器文化の一つ過程（段階）をそれぞれ表すものとして、積極的に評価』し、さらに石器群が検出される層位に重点を置き、『層位的出土例の検討によって石器群の段階的把握』（諏訪：1988）を行った。この編年で諏訪氏は、矢島・鈴木編年の相模野第Ⅱ期後半を段階Ⅲ・Ⅳと二分、相模野第Ⅴ期を段階Ⅶ～Ⅹと三分することにより10の区分、さらに縄文時代草創期を段階Ⅺ・Ⅻの2つに区分し、合計12の段階に設定している。

2. 武蔵野台地の編年

小田・キーリー、C.T.（1973、1975）、小田他（1977）編年 野川やICULoc.15、はけうえなどの重層した遺跡の発掘調査によって蓄積した石器群を、出土層位と、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石刃などの示準石器に重点をおいて整理し、『石器群の様相、礫群、層序などをからませ』（小田：1980）で、Ⅰ～Ⅳの文化期に大別した。概要は武蔵野層位のⅤ層以下をナイフ形石器が未発達な時期としてⅠ期、Ⅲ層下部からⅣ層をナイフ形石器の質量共に卓越する時期としてⅡ期、Ⅲ層中部の細石刃・細石刃石核の時期をⅢ期、大形の両面加工尖頭器がみられ、縄文時代草創期に移行する様相を呈するⅢ層上部をⅣ期として大区分した。さらに大区分した中からさらに第Ⅰ文化期をa・b・c亜文化期、第Ⅱ文化期をa・b亜文化期と細分している。

3. 多摩丘陵の編年

館野（1988）編年 多摩ニュータウン事業に伴い調査が行われた60箇所の遺跡をもとに構築されている。編年の特徴は、石器・石材組成、石核から見た剥片剥離技術、相模野・武蔵野台地との対比、礫群の共伴や規模等の重点項目の他に丘陵地という非常に入り組んだ地形を考慮し、「河川」にも注意を払っている点である。概要としては、立川ロームのAT以下を第Ⅰ段階とし、十分な資料がないとしながら剥片剥離技術や礫群・配石の存在などを予測している。VH層下部からVI層にかけてを第Ⅱ段階、VH層中位を第Ⅲ段階、VH層上半部を第Ⅳ段階、VS層を第Ⅴ段階、IV層下部からVS層の境界辺りを縄文草創期段階として区分している。

以上の4氏の編年を右図にまとめて掲載した。現段階においておおまかな部分では対応できるようである。今後の課題としては、各時期の細かい部分での不整合をどの様に整理・理解していくかであろう。（三瓶裕司）

相模野層位		石器群 検出層	主な遺跡	編年案		武蔵野層位		石器群 検出層	編年案 小田	主な遺跡	多摩丘陵		編年案 館野 草創期 段階
F B	L		慶応 S F C ノ宮下谷戸 花見山 宮之前 2 I 勝坂		段階 XII				IV 文化期	多摩ニュータウン Na.116 多摩ニュータウン Na.125 多摩ニュータウン Na.426 前田耕地 前原 II なすな原			
新移層	新移層 ~ L 1 S				段階 XI								
L 1 S	U		栗原中丸 I 寺尾 I 上和田城山 I						III 層	はけうえ III 上野川 III 前原 III 仙川 III 星谷津 III 中, IV 上 多摩ニュータウン Na.740 多摩ニュータウン Na.388	VS		V 段階
	L		栗原中丸 II 下鶴間長堀 I 相模野 149						III 文化期				
BB 0	U		報恩寺 柏ヶ谷長ヲサ II 風間 I a	相模野 V 期	段階 X				III 文化期				
	M		上草柳 I I 栗原中丸 III 早川天神森 II 柏ヶ谷長ヲサ II		段階 IX				第 II b 亜文化期	鶴ヶ丘 Y 1 野川 IV 1, 2 前原 IV 上 鈴木 IV 上 新橋 IV 上 平代坂 IV 上 高井戸東 IV 上 砂川 前原 IV 中 1 三の丸			
	L												
L 1 H	U		吉岡 B かしわ台駅前 II 柏ヶ谷長ヲサ IV 上草柳 3 東 上草柳 3 西 II		段階 VII				II		VH		IV 段階
	M		宮ヶ瀬サランケ III 上柏屋上尾崎 月見野 III A 栗原中丸 IV 長堀北 IV										
	L												
BB 1	U		台山 III 深見諏訪山 III 中村 IV 橋本 II	相模野 IV 期後半	段階 VII				中 文	西之台 B IV 中 はけうえ IV 中 多聞寺前 IV 中 2 前原 IV 中 2 受地だいやま 東寺方 多摩ニュータウン Na.27 多摩ニュータウン Na.57			
	M		栗原中丸 V 下鶴間長堀 III 長堀北 VI										
	L		古淵 B 深見諏訪山 IV 代官山 V 長堀南 IV	相模野 IV 期前半	段階 VI				下 期	下高井戸東 IV 下 多摩ニュータウン 774 II 前原 IV 下 自由学園南 IV 下 多聞寺前 IV 下 多摩ニュータウン Na.105 B 多摩ニュータウン Na.426 3 多摩ニュータウン Na.426 4	VH		III 段階
L 2	U		長堀南 IV 下鶴間長堀 IV 古淵 B 長堀南 C 見野 III C										
	M												
	UU		上和田城山 VI 川天神森 VI・L 代官山 VI・VII	相模野 III 期	段階 V								
BB 2	UL		地蔵坂 寺尾 V 上野 1						V 層	はけうえ V 上 館町 東早瀬 5 高井戸東 V 嘉留多 3 武蔵台 V 葛原 B V 東京天文台 V 野川 鈴木 V 多聞寺前 V 多摩ニュータウン Na.769 5	VI 層		II 段階
	LU		上草柳 2 長堀南										
	LM		かしわ台駅前 V 国分北三丁目 II										
	LL		地蔵坂 柏ヶ谷長ヲサ 相模野 149 橋本 V										
A													
L 3	AT 下位		高座渋谷 VI 吉岡 C 慶応 S F C VI		段階 IV				VI 層	鈴木 VI・はけうえ VI 西之台 B VI・野川 VI 東京天文台 VI 高井戸東 VI			
	L3-B3		南銀治山	相模野 II 期後半									
BB 3	U		寺尾 VI 地蔵坂 VI 上土棚 VII						上	多聞寺前 VII はけうえ VII 御殿山 VII 多摩ニュータウン Na.57-C 多摩ニュータウン Na.402	VIII 層		
	M		根下 III 台山 IV 地蔵坂 VII 早川天神森 VII		段階 III				下	多聞寺前 鈴木 VII 東京天文台 VII 嘉留多 VII			
	L		吉岡 C 柏ヶ谷長ヲサ 上和田城山 III (4 次)										
L 4	BB3-下部 ~L4 上面								VII 層				
	UU		地蔵坂 VIII 藤沢市 No.220 吉岡 A B C D E						VIII 層				
	U		根下 IV 柏ヶ谷長ヲサ X III										
BB 4	UL		吉岡 C 古淵 B 吉岡 C	相模野 II 期前半	段階 II				IX 層	高井戸東 武蔵台 下山 多聞寺前 IX 鈴木 IX はけうえ IX 上			
	M		代官山 X 根下 V 吉岡 D 藤沢市 No.399 II						中	高井戸東 鈴木 III	IX 層		
	L												
L 5	U		栗原中丸 IX 早川天神森 VIII 寺尾 VII		段階 I				下	高井戸東 IX			
BB 5	L5-BB5		藤沢市 No.269 II	相模野 I 期					a	武蔵台 X a 鈴木 高井戸東 X a	X 層		
	UL		吉岡 D 早川天神森 IX 南銀治山 早川天神森 X						b	武蔵台 X b 西之台 B 鈴木御幸第一地点			
	L 6								c				
武蔵野 ローム			代官山 吉岡						XI 層	中山谷 南平 多摩ニュータウン Na.471B	XI 層	武蔵野 ローム	

第6図 各台地の編年区分

編年研究の現状と課題

1. 編年とは何ぞや

編年は「歴史上の事柄の新旧・前後の関係を明らかにし、年代的序列をつけること。編年体の歴史」であり、編年体は「歴史編纂の一体。年月の順を追って事実を記載」し、「春秋」に始まる」が広辞苑上の解説である。有史、こよみの中での行く年来る年は指折り数えることが可能だが、先史、特に関東ローム層の時代となると、土層堆積をまづもっての、唯一拠り所として、時間序列を組み立てざるを得ないのであり、至当な方法なのである。しかし、編年の困難性は、調査上忽ち随所に出現することは、日常茶飯事な調査要件となってくる。それは、遺跡群の形成類型(砂田1996)を言い換えれば、同一空間と同一時間の分布幅の中にあっても各々の遺跡の通時間幅はすべて異なり(類型1・3)、異空間と異時間幅の中で同等の遺跡を検定すること(類型2・4)は至難の技なのである。かといって、編年の基本的要件は、岩遺跡の報告書において、要約すれば、関東ローム層から人工物がまとまりをもって地層の堆積順に出土する事実(安蒜1999)としての的確に表現されている。発見の時代は蓄積の時代を経過しながら、示準石器による編年と石器組成による編年といった二大潮流を相互補完しつつも、前者が武蔵野編年として、後者を石器に関わる自然環境をも含めたすべての組成としての相模野編年と言い得よう。言い換えれば、相模野編年は編年とは言うものの、歴史叙述の紀伝体を総括した編年体系として了解可能かもしれない。その意味では、本紀(帝王一代の年)列伝(民族や個人の伝記)・志(特殊な分野の変遷)・表(制度の一覧)の解説を指向する内容をも孕んでいるのである。

2. 絶対編年と相対編年

近年のAMS (Accelerator Mass Spectrometer) 法による年代測定は、従来の測定法とは異なり、試料の最低必要量や測定誤差の少なさから、その使用が活発化している。ただし、従来の測定方法が全く使えないのではなく、重要なのは補正值 (Calibration data) を求める点である。補正方法については各種のプログラムがホームページ上でフリーウェアとして公開されている。

しかし、そうして求められた絶対年代が確率論上の算定値に過ぎないことは言うまでもない。φの幅を広げればその年代値としての確率は高まるものの、その値はある機器がとある期間で求められた時点の年代であり、同一試料であっても測定装置が異なれば算定値は異なるし、同一測定機器であっても、機器の使用期間や使用状態によってもその測定値は異なるのである。現在、世界中では130以上の測定機器があるという (c14.sci.waikato.ac.nz) から、その測定誤差こそ計り知れないのである。あくまでも、「絶対年代」とは私は「絶対的确实」(absolute sichere) な年代と云ふ意味で使っているのではない。勿論以下記す所の研究法の助けに由って得らる可き年代決定は、我々が之を以て全然満足しなければならない程度の、大なる確実性を有しているのではあるが」(モンテリウス 157頁) という、Willard F.Libby氏生前の言説は時代を超えて認識すべきなのである。さらに、近年注目すべきは年縞堆積物による絶対年代の算定である(福沢・山田・加藤 1999)。湖沼堆積物から算出する季節差による年代値は、最寒冷期 (Last Glacial Maximum) の新たな提示とも絡んでいる。絶対年代と言われる年代の算出意義は、列島内に限らず、全世界的な文化史的並行関係を明らかにするには極めて有効な方法であるが、その手順の比較の方法の検討を怠ってはならないのである。絶対年代による編年は、魅力的かつ実証的であるように看取できるが、今後の測定法の開発精度の進捗や補正方法の統一化によっては、絶対年代に一喜一憂することなく、相対年代の目で絶対年代を援用すべきなのだろうか。

相対年代を普請する基本は自然層序の区分である。しかし、同一自然層序だからといって、万人が同一の自

然堆積物を同一に分層することは不可能である。匿名的个人であっても同一分層など困難極まりないのである。しかも、遺物は堆積土中で移動するのである。先の遺跡群形成の四類型は自然堆積土中の全ての遺物に充当するのである。ここ10年間で定着したかに見えるワイナンバーによる土層区分は、彼らの言う我々考古土層の区分をはるかに凌駕する細分である。YNo（新期ローム層のテフラ番号:younger No）は、木曽御岳第一軽石をY-1として、FB層下底がY-141上部としている。SNo（新富士系テフラの須走:Subashiri）は、FB層最下部を除いた部分にS-0-1~6からS-25までのテフラ番号を付している。当初の考古土層ラインマーカ達からは、スコリア観察による土層区分は、なるほど客観性を帯びているかのように見えた。しかし、ワイナンバーによる土層区分のデータが蓄積されるにつれて、ワイナンバーが考古土層区分のゆらぎ幅を超える状況に至っている。客観的に見えたYのナンバリングは、スコリア区分数が多いだけに、より高い客観的成果を得るには肉眼観察のみならず、顕微鏡によるスコリア断面の比較観察など、より微視的観察が常態となるべきだったのである。その意味では、各現場の土層を最も数多く観察する調査担当者の見る目が基本なのである。

3. 編年構築にあたって

どんな場合にしろ、編年という相対的事実認識を実行する場合、無意識な編年情報の個別的選択や資料体の意図的選択は慎重にならざるを得ないのである。関東ローム層中から抽出した資料体に編年という分類体系を付与し、さらにそこから何らかの解釈を得ようとする場合特に危険である。彼らの思考の下で彼らが遺存した石器群に、真の編年体系などという「時には、本当は存在しない「文化コード」を無理矢理」作り上げることになりはしないだろうか（板橋1989 48頁）、分野は異なるが深化したい文言である。（砂田佳弘）

おわりに

相模野旧石器の編年作業は継続する。新出の石器群を常に視野に入れつつも個々の資料と石器群総体を見据えながらの作業である。「統合しながら同質の石器群を時間的、空間的にまとめ、それらの石器群の構造の変化の様相を時間・空間軸に沿って整理し、石器文化の変化の内容と方向を把握する（鈴木・矢島1978）編年と、重複関係を持つ石器群を一文化層ごとに層位的に並べ、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃、石斧等の出現・発展・終焉と、各器種の形態組成変化、技術基盤の変化に画期を見だし、この画期から次の画期までの共通した特徴を持つ石器群を抽出し段階として設定（諏訪間1988）」（大塚 1999）にまとめられる。時期間と段階間には常に移行期なる言辞が潜む。実際の移行期など、時間幅の如何に関わらず捉えようもないのはずなのだが、年表の斜行関係や傾斜編年に顕著である。あえて移行部分を抽出するとなれば、それは相模野台地という列島内でも秀でた層位的序列を視覚的に把握できるフィールドに限られよう。相模野の卓越した層位区分は編年の有効性を捉えるには極めて特異な存在でもある。ただし、その層の厚さ故に、より下層の石器群が大々的に登場するには、泡沫現象下の一部の調査以外に未だ好機は到来していない。

相模野旧石器の編年の網の目は、繕いつつもどのような石器群が出現しようとも、直接的にその編み目に投げ込むことが可能である。しかしそれが究極的な編年でないことはもちろん、編み目の張り方次第によっては編者が選別した資料体を何らかの有意性によって恣意的に網の目を結ぶこととなる（浜本1989 87頁）。

我々の編年作業は、「象徴論的な人類学が誤認するであろうような、何かを言い表す象徴のシステムでもなければ、伝達のシステムでもなく、あえて言えば「恣意性」を中枢にすえた秩序の機構」にあり、「その機構の外部にいる者にそれを「呪術的」に見せてしまうのである」（浜本 1997 370頁）。（砂田佳弘）

引用・参考文献

- ※紙面の都合上、すべての文献を掲載することが出来なかった。御容赦願いたい。
- 我孫子昭二・堀井晶子 他編 1980 『多摩・坂道遺跡』 国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- 安蒜政雄 1986 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座 日本考古学』 第5巻
- 安蒜政雄 1992 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作作業の体系」『駿台史学』86 pp.101-128
- 安蒜政雄 1999 「岩宿遺跡と日本旧石器時代研究-岩宿からの問いかけ-」 第7回 フォーラム／シンポジウム『岩宿発掘50年の成果と今後の展望』 予稿集 pp.14-18
- 板橋作美 1989 「象徴論的解釈の危険性あるいは恣意性」『異文化の解説』 pp.3-54
- 内田好昭 1999 「日本考古学の履歴」『物質文化』67 pp.2-10
- 大塚健一 1999 「相模野編年とその問題点」 かながわ考古学財団 旧石器プロジェクトチーム発表要旨
- 岡本 勇・松沢亜生 1965 「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」『物質文化』(6) pp.1-14
- 小田静夫 他編 1980 『西之台遺跡B地点』 東京都教育委員会
- 小田静夫・阿部祥人 他編 1980 『はけうえ』 国際基督教大学考古学研究センター
- 小田静夫・伊藤富治夫 他編 1977 『高井戸東遺跡』 高井戸東遺跡調査会
- 加藤晋平 1984 「日本細石器文化の出現」『駿台史学』 第60号
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『かながわの考古学』第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.1-22
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1995 「旧石器時代終末における石器群の諸問題(続) - F層下部からL1H層の石器群の様相」『かながわの考古学』第5集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.1-24
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1996 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L2~B1層石器群の様相」研究紀要1 『かながわの考古学』 かながわ考古学財団 pp.1-36
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1997 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-B2層石器群の様相」研究紀要2 『かながわの考古学』 かながわ考古学財団 pp.1-16
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1998 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L3~B3層石器群の様相」研究紀要3 『かながわの考古学』 かながわ考古学財団 pp.1-14
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題-L4層以下の石器群の様相」研究紀要4 『かながわの考古学』 かながわ考古学財団 pp.1-14
- 栗原伸好 1999 「相模野Ⅲ期とⅣ期の間」『神奈川考古』35号
- 小池 聡 1999 『大和市 Na210遺跡』
- 小林達雄・小田静夫 他 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4 pp.231-270
- 相模考古学研究会 1971 『先土器時代遺跡分布調査報告書 相模野篇』
- 佐藤嘉広 1988 「日本考古学における層位論的研究的特質」『紀要』Ⅷ pp.1-36
- J.E.キダー・小山修三 他 1970 「関東地方の先土器編年:ICU Loc.28c」『人類学雑誌』80-1 pp.140-156
- J.E.キダー・小田静夫 他編 1975 『中山谷遺跡』 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 1
- 柴田 徹 1998 「遺跡ごとに見た石質組成とブロックごとに見た石質組成に関する一考察-千葉県松戸市内における旧石器時代の遺跡を中心として-」『松戸市立博物館紀要』 第5号 pp.1-30
- 鈴木次郎・小野正敏ほか 1972 『小園前畑遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木次郎 1974 「VI. 砂川遺跡の石器群」『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡-第2次調査の記録-』
- 鈴木次郎 1989 「第1章 先土器時代-赤土の中に残された人類の文化」『大和市史』1 通史編 pp.3-125
- 鈴木次郎 1994 「南関東地方の様相」『第2回 岩宿フォーラム／シンポジウム 群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集 pp.49-52
- 鈴木次郎 1996 「II 石器群の様相」『かながわの考古学』 かながわ考古学財団研究紀要1 pp.15-18
- 鈴木次郎 1999 「編年論」『石器文化研究』7 pp.161-170
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 雄山閣 pp.144-169
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 新版 雄山閣 pp.154-182
- 白石浩之 1992 「旧石器時代後期から縄文時代草創期の集落」『神奈川県下における集落変遷の分布』かながわ考古学2 pp.1-14
- 白石浩之 1997 「石槍の分布とその様相-樺状剥離尖頭器から見た集団の動き-」『人間・遺跡・遺物』3 pp.27-47
- 砂田佳弘 1993 「先土器時代石器群研究の行方」『かながわの考古学』第3集 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.18-27
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の出現-器種変遷と石材流通-」『國學院大學考古学資料館紀要 第10輯』
- 砂田佳弘 1996 「遺跡群の形成」『石器文化研究』5 pp.305-320
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について-層位的出土例の検討による石器群の段階的把握-」『神奈川考古』24
- 諏訪間順 1995 「南関東地方A T上位石器群の変遷」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』予稿集 pp.341-359
- 芹沢長介 1967 「日本における旧石器の層位的出土例と14C年代」『研究報告』 第3集 日本文化研究所
- 千葉 寛・西村勝広 他編 1989 『野川中洲北遺跡』 小金井市教育委員会
- 歳原加世子・根本忠一 他編 1982 「嘉留多遺跡・砧中学校7号墳」 世田谷区遺跡調査会
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社
- 竹岡俊樹 1997 「柏ヶ谷長ヲサ遺跡第・文化層出土のナイフ形石器の分析」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』
- 中津由紀子・千浦美智子 他編 1977 『新橋遺跡』 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 4
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地IV下・V上層段階の遺跡群」『旧石器考古学』51 pp.19-36
- 浜本 満 1997 「妻を引き抜く方法-規約的必然としての「呪術」的因果関係-」『民族学研究』62-3 pp.360-373
- 早川 泉・横山裕平 他編 1984 『武蔵台遺跡I』 都立府中病院内遺跡調査会
- 福沢仁之・山田和芳・加藤めぐみ 1999 「湖沼年縞およびレス-古土壌堆積物による地球環境変動の高精度復元-」『国立歴史民俗博物館研究報告』81 pp.463-484
- 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969 『概報月見野遺跡群』
- モンテリウス著・浜田耕作訳 1932 『考古学研究法』 p.182
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会 pp.1-30
- 吉田政行 1998 「鈴木次郎論-編年をめぐる「砂川」研究者列伝(2)-」『石器文化研究会 第126回例会資料』
- <http://www.c14.sci.waikato.ac.nz/webinfo/k12.html>